あぜ塗り、草刈り、もみ殻すりつぶし…

農機活用し省力体系

長野県信濃町高沢地区では稲作、ソバ、きのこの栽培で、さまざまな中山間地対応の機械を取り入れた省力的な体系づくりを進めている。使っているのはあぜ塗り機や自走傾斜地草刈り機、もみ殻すりつぶし機など。担い手が少ない中、農地の遊休化の防止にうまく機械を役立てており、中山間での機械利用の一つのモデルケースといえそうだ。

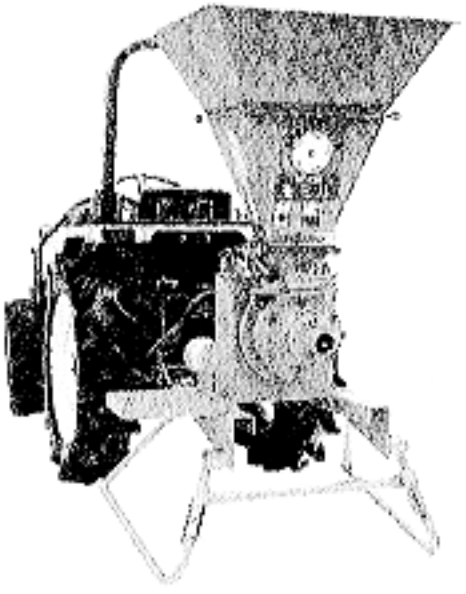
同地区は黒姫高原の北端にある中山間地。所得の安定化のため、地域で農事組合法人を設立。当初はブナシメジの栽培だけだったが、ソバの加工販売も始めた。一方で、農地の遊休化も進んでおり、農地の利用集積も検討されている。労力不足を補うため、長野農業改良普及センターが中心になって、農機メーカーの協力でさまざまな中山間地用機械を同地区に試験的に導入し、省力化の効果をみた。

稲作ではあぜ塗り機（SZ250K＝クボタ）、セミクローラ型トラクター（GB14＝PC＝クボタ）、土壌改良材や肥料を散布する自走式肥料散布機（FSK100＝佐藤製作所）、自走傾斜地草刈り機（SP50＝オーレック、CC1000＝クボタ）、わら処理のための小型ロールベーラー（SE500＝タカキタ）などの機械で体系化した。

ソバ栽培では排水対策の溝掘り機（RD125＝松山）、施肥と種まきを同時に行うロータリーシーダー（MRX5＝松山）、収穫は大豆ソバ用コンバイン（DC1＝クボタ）を使った。

また、きのこ栽培ではもみ殻を培地に利用するためのもみ殻すりつぶし機（三陽機器＝ML250）などを導入した。

同普及センターの山崎鑽章氏は、このほど開かれた全国農業システム研究会の中で、個々の機械について省力化の程度を説明し、「非常に効率的だった」と評価。一方、「高価なため適正規模での利用が大切で、共同利用を考えなければならない。また、園芸作物と併用できる機械は利用拡大し、できるだけ生産費を抑えることが重要」とまとめた。



きのこ栽培の培地作りに活躍するもみ殻すりつぶし機

長野県の中山間地 農地の遊休化防ぐ